中ソの思惑

ティーチ・イン 動き出す朝鮮平和構造 ④

"大国エゴ"に立つ和平

中島　さる六月、ソウルを訪問して、民間国際問題研究所で韓国の学者たちと話し合ったのだが、「中ソどちらと先に接近した方がよいか」などと大胆な質問や意見が出て時代の急速な変化に改めて驚いた。私が「中国は在韓米軍の撤退を望んでいないと思う」というとその証拠があるかとも突っ込まれた。韓国にとって、いまや対中ソ関係は単なる一般論ではない切実な現実なのだ。

もちろん、中ソともに、北朝鮮の意向を無視できず、急速な対韓接近を進めることは考えられないが、中ソは基本的には朝鮮半島の現状維持を希望していると私は考える。特に中国は、対ソ関係から、朝鮮半島をめぐる軍事バランスの激変を望んではいない。中国は朝鮮戦争当時、高崗支配下にあってまだ不安だった中国東北へのソ連の軍事圧力の増大を恐れて、やむなく人民義勇軍を参戦させ、多大の犠牲を払った。その二の舞をしないよう極力警戒しているといえる。

北京の方が近い

A　一口に中ソといっても、その間に微妙な差があると思うが。

C　中ソとも北朝鮮と国境を接しているが、歴史的、文化的な距離感はうんと違う。北京は近いが、モスクワは遠い。心理的にも。近いから中国の方が朝鮮問題に真剣なのは当然だが、切実だから、より慎重に現実的にならざるを得ない、というわけで、ソ連の方が何をするかわからぬという不安が残るな。

B　大きく国際的に見ても、米中関係の方が、米ソ関係より安定している。朝鮮問題に対するアプローチも、米国と共通できるのは中国であってソ連ではない。

中島　確かに、中ソの対応の仕方には違いがある。ソ連は月初めにモスクワで開かれた国連協会世界連盟の会議に出席した金相俊ユネスコ事務局長ら韓国人三人の入国を認めたのをはじめ、スポーツ、学術、文化交流、交易などの面で、次第に韓国との接触を強めている。だが、中国の場合は、韓国へのトウガラシの輸出が報じられた程度で、それ以上の接触の動きはない。アジアでは、ソ連は米中に比べて立ち遅れ気味なので、どうしても現状打破的な態度になりやすいのだろう。

C　米国の専門家たちの中にも、朝鮮半島で緊張が激化することは米中両国にとっては何のメリットもないが、ソ連だけは利点がある、との見方があるそうだ。ソ連は当面、極東よりも石油の宝庫である中東を重視しているが、第四次中東戦争以後、米第七艦隊がインド洋、中東方面にもにらみを利かせているのが目障りで仕方ない。そこで朝鮮半島で緊迫状態が続けば、第七艦隊を極東に引き戻すことができると踏んでいるのではないか、というわけ。

中島　全欧安保会議の成功後、ソ連はソ連版アジア集団安保構想の売り込みに拍車をかけている。中国封じ込めの一環として、ソ連が北朝鮮だけでなく韓国まで手をのばそうとしている気配は確かだ。

C　「ソ印条約はアジア集団安保の基本的エレメントの一つになりうる」と強調しているソ連誌の論文を読んだことがある。北朝鮮との友好協力相互援助条約（一九六一年）に加えて、韓国ともソ印条約のような平和友好条約を結ぶことをねらっているフシがある。

B　そこまではカングリ過ぎだよ。ソ連と韓国との接触はいろんな形で増えてはいるが、それなりの"原則"は踏まえているよ。ユニバーシアードをはじめ各種スポーツ大会への韓国選手団の入国を認めたのも、ソ連が執念を燃やしていたオリンピックのモスクワ招致実現のためには、スポーツ大会の参加者"無差別"の原則に忠実なことを示す必要があったからだ。北朝鮮を中国の影響力のもとに決定的に追いやる危険まで冒して、韓国と急速に接近すると考えるのは観念論だ。

C　そうかな。中国が第三世界の盟主という建前から、韓国に接触できない点を十分計算のうえ、韓国まで影響力をのばそうとしている。もちろん、対中国包囲網の一環としてだ。

A　では中国の方は。

中島　ベトナム解放の最後の勝利は、ソ連製近代兵器による大攻撃で達成され、解放後のベトナムではソ連の影響力が強まっている。前の朝鮮戦争のときも、義勇軍の血を流したのはソ連でなくて中国だった。これは中国にとって苦い教訓だろう。ソ連にうまく利用される危険が大きいのだ。

C　中国は四月に金日成主席を北京に迎えたあと、九月に張春橋副首相が平壌を訪問している。このところ首脳の往来が途絶えているソ連・北朝鮮間に比べれば、北朝鮮との関係はずっと緊密なように見える。だが、両国の主張には、いくつかの点で微妙な食い違いがある。例えば、先日の読売新聞の質問に対する金主席の回答は、日米安保条約の廃棄の必要を強調していたのに対して、中国首脳は最近では、日米安保が日本の対ソ防衛のために有用だとの見解を漏らしている。

中島　今回のキッシンジャー訪中、訪日に続く十一月末のフォード訪中で、米中日の関係強化がどうなるかだが、その結果次第では中国が日韓関係を米中関係のサブ・システムとして"黙認"する可能性もありうる。もちろん公式には北朝鮮支持だが。

B　その公式の北朝鮮支持も、この四月の金日成主席の北京訪問のときの共同コミュニケのように、北朝鮮の「自主平和統一政策」支持で"武力統一"にはワクをはめている。

どうなるか毛以降

A　いまはそうだとみていいが、毛周以後の中国はどうなる。

中島　だれが中国の後継者になるかの問題は難しいが、妥当なのは現状では鄧小平、張春橋だろうと考えている。鄧小平は党、政、軍を握り、そのリーダーシップは極めて大きい。もともとは実務派だが、理論、戦略面で周恩来とも、対ソ観では毛沢東ともやや一致する。例えば六五年の米の北ベトナム爆撃の際、ソ連が社会主義諸国の反米統一戦線結成を提唱したのに対し、毛沢東はソ連を含めた統一戦線はまっぴらと拒否したが、鄧小平ら当時の実権派は、米帝に対抗するためならソ連との提携もやむを得ないとの立場だった。だから、毛以後、鄧小平が実権を握れば中ソ両党関係が変化する可能性は考えておいてよいと思う。その変化の中で、北朝鮮との関係も、北朝鮮の反米解放路線のバックアップの方向が強まるかもしれない。

A　現在までのところ、中ソとも朝鮮に目新しく派手な動きをみせてはいない。ソ連の対韓態度に若干の動きがみられる程度だが、中ソともが朝鮮では互いにけん制し合って急激な現状変更を望んでいない、というネガチブな動向が、逆に新しい平和構造作りの土台にもなっているわけだ。前回までの討論でしばしば指摘された米朝接触にしても、中ソ、特に中国の暗黙の側面援助なしには実現できない。中ソの陰の役割に強く期待したい。

なかじま　みねお
中島　嶺雄
東京外語大助教授